

複言語プログラムの中国語

—概要と提言—

多语种教学课程中的汉语

—概要与提议—

蟹江静夫

Shizuo KANIE

はじめに

名古屋外国語大学（以下「本学」と称す）では、外国語学部中国語学科の学生以外にも複言語プログラムとして中国語を学ぶ機会が与えられている。ここでいう中国語とは「普通話」といわれる共通語を指す。本稿は本学で行われている複言語プログラムとしての中国語教育の概要を示し、筆者の担当する外国語学部英米語学科における授業（中国語A－3/4）から得た提言をいささか述べるものである。

1. 複言語プログラムとは

本学のHP (<http://www.nufs.ac.jp/faculties/language/multi-program/index.html>)によると、複言語プログラムに課せられた目的は、大きく以下の3点にまとめられる。

- (1) 場面や相手に応じて複数の言語を使い分けることができる。
- (2) 自国や自分だけにかかわる狭いものの見方ではなく、他国や他国者を正しく理解する「広角的で複眼的なもの見方」を身につける。
- (3) 日本語と専攻言語を客観的に見る視点や、複数の言語習得によって得られたり深められたりした「複層的な知識や着眼点」を獲得する。

ここで印象的なのは「広角的」「複眼的」「客観的」「複層的」といった語句である。実用面において多言語話者をめざすことに加えて、母語だけでなく、外国語も知ることによって、世界の多様性を理解し、自らの視野をより広くしていこうというものであろう。教員もこの視点に立って、授業を運営していくことが望まれる。

2. カリキュラムについて－概要

本学における複言語プログラムの中国語のカリキュラムは以下のようになっている。なお、各学年ともに統一シラバスで、テキストも同一のものを使用している。

1年次では各学期週2コマ設定されている（中国語A-1/2と中国語B-1/2）。テキストはAが竹島金吾監修『最新2訂版 中国語はじめの一步』（白水社、2012年）、Bが張勤『中国語の教室』（白帝社、2014年）である。いずれも本文が会話体で構成されており、それをもとに中国語の発音、そして基本的な語彙と文法を学ぶものである。1年次では2冊のテキストを同時進行で学び、1年間でそれぞれ学び終える。

2年次も1年次同様週2コマ設定されている。（中国語A-3/4と中国語B-3/4）。テキストはAが依藤醇ほか『中級中国語教室 実践会話のクラス』（白帝社、2016年）、Bが本間史ほか『2年めの中国語ポイント45』（白水社、2014年）である。前者は本文が会話体で構成されている。ポイントは文法事項の説明ではなく定型句になっており、本文に出てきた表現のバリエーションを紹介するものである。練習問題は本文やポイントに出てくる表現を対話形式で練習したり、日本語のヒントから中国語の表現を引きだそうとしたりするものである。後者は文法学習に重きを置いたもので、まずポイントで各課3～4の文法事項を学んだ後、会話体の本文で表現例を確認し、練習問題で応用力をやしなうものである。1年次がAとBが同時進行で基本的な事項を徹底的に教え込むのに対し、2年次ではAが会話力を伸ばそうとするものであり、Bが文法力の強化をめざす、という分業がなされているのが特徴といえよう。

3年次でも週2コマ設定されている（中国語A-5/6と中国語B-5/6）。会話と講読の分業のもとにテキストが決められている。テキストはAが劉穎ほか『2冊めの中国語《講読クラス》』（白水社、2012年）、Bが佐藤晴彦監修『たのしくできる We Can! 中国語中級』（朝日出版社、2013年）である。Aが文章体の本文を読むことで読解力の強化をめざすもの、Bが会話体の本文による文法・文型の学習をするものである。いずれも文法事項が充実しているテキストであり、中国語の基礎知識の総まとめをすることができる。

なお、中国語能力のさらなる向上をめざす学生は、中国語学科の3年生以上の学生向けに開講されている「HSK・中国語検定対策1/2」を受講することもできる。これはHSK（漢語水平考試）5級以上、中国語検定2級以上をめざすものであり、筆者が担当しているが、文法と語彙の強化をテーマに掲げている。

2017年には本学より単語集、名古屋外国語大学言語教育開発センター編『中国語はじめての1000語』（名古屋外国語大学出版会、2017年）が刊行された。テキストの学習と同時並行してこれを学べば、単語の知識の偏りをなくすることができるし、日常的によく使われる語句を系統的に身につけることができる。さらに、本学ではHSKや中国語検定を取得すれば、取得した級によって所定の単位を得ることができる。複言語プログラムはもとより資格試験取得のためだけにあるものではないが、資格の取得が動機づけになることも否定できない。授業で学んだことを資格という形に残し、自分の実力を相対化し、客観視すれば、その後の学習の指針とすることができる。就職活動を有利に進めることもできる。教育内容からすると、1年次ではHSK2級から3級、中国語検定準4級から4級、2年次ではHSK3級から4級、中国語検定4級から3級、3年次ではHSK4級以上、中国語検定3級以上をめざすことができるようになってきている。

また、内外の中国語スピーチコンテストに参加することも奨励されている。全国的な大会に出場し、みごと受賞した学生もいる。

ただひとつ課題として挙げられるのは、多くの学生が2年次までで中国語学習をやめてしまうことであろう。専攻語に忙しくなったり、留学をしたり、

就職活動をしたりなど、さまざまな理由から複言語にまで手が回らないのかもしれない。

3. 授業で求められるものは一言

本章では中国語教育を論ずるうえで取り上げられるごく一般的なことと絡めながら、外国語学部英米語学科で教えた経験をもとに、授業に対する提言をいささか述べておきたい。

3.1 発音

中国語教育のパイオニアである相原茂氏はエッセイ集『午後の中国語』（同学社、1990年10月）において「中国語発音よければ半ばよし」と書いておられる（65－69頁）。それほど中国語においては発音が重要なのである。1年次で使用している『最新2訂版 中国語はじめの一步』によると、(1) 声調、(2) 声調の組み合わせ、(3) 単母音、(4) 子音（無気音／有気音、そり舌音）、(5) 複合母音、(6) -n、-ngをともなう母音、の順序で練習するようになっている。

なかでも声調の練習にはとくに時間を割く必要がある。そのさい平井勝利『教師のための中国語音声学』（白帝社、2012年10月）が述べるように（98－101頁）、二音節語を使って練習するのが望ましい。筆者はプリントを用意して、毎回授業開始後5分ほど二音節語を使った声調の練習を行っている。学生の発音を聞いていて、声調の習得がいささかおろそかになっている点が気になるからだ。英語が語句の強弱アクセントや文単位でのイントネーションが重要であるのに対し、中国語ではそれぞれの漢字の声調を正しく読まなければならないことを強調しなければならない。声調が異なれば意味もまた異なるからだ。たとえば、学生の多くは「第3声＋轻声」を「第2声＋轻声」に読んでしまう。これは教員が第3声を声調記号のごとく「深い凹みである」（平井前掲書、61頁）と教えることから生じる弊害である。当初から第3声は低く平らに発音する（低平調、いわゆる「半三声」）と教えなければならない。そうでないと学生は“买的 mǎi de”（買ったもの）をいつまでも“埋的 mái de”

(埋めたもの)と発音してしまう。一度染みついてしまった癖はなかなか直せないものである。

3.2 ピンイン

発音を練習するとき、同時に中国語の発音表記システム「ピンイン」(拼音、1958年制定)のつづり方を覚えていくことになっている。ピンインはアルファベットを使用したものであるが、あくまで中国語の発音を示したもので、独自のルールがある。ピンインが読めなければ漢字を正しく読むことができない。ところがピンインをしっかり把握しないまま2年次に上がってきた学生が少なくない。たとえばwoを複合母音(uo)であることを忘れて「ウー」と読んでしまったり(正確には「ウオ」)、canを英語のように「キャン」と読んでしまったり(正確には「ツァン」)、ziを「ズイー」と読んでしまったり(正確には口を横に引いて「ズー」)する。ian(イエン)とiang(イアン)の違いも何度も指摘しなければ覚えるのが難しいものである。竹中佐英子「経済学部中国語教育に関する一考察(五) - ピンイン習得ストラテジーを中心に」(『経済論集』41巻2号、東洋大学、2016年3月)はピンイン習得の重要性を、(1)学習上の必要性(テキストを読む、辞書を引く)、(2)実用面での必要性(パソコン・スマートフォンで中国語を入力する)、(3)資格取得での必要性(中国語検定ではピンインを問う問題が出される)の3点にまとめている(108頁)。

ピンインを読めるだけでよしとするか、書けるところまでもっていきべきか。中国語教育でよく問題になることだが、少なくとも週2コマを3年間学ぶカリキュラムになっている本学では、やはり書けるところまでもっていきたい。そのためには地道に授業でピンインの諸規則を確認していくしかないであろう。

3.3 簡体字

本学で学ぶ中国語は「はじめに」でも述べたように、中国大陸での共通語「普通話」である。中国大陸では「簡体字」(1956年制定)が正字として使わ

れている。簡体字は日本で通用している常用漢字や旧字体とは大きくことなるものがあるので注意を要する。

授業中に練習問題などを学生に板書させると、簡体字を正しく認識していない学生が少なくないことに気がつく。よくわかっていなくても人前で質問をするのが恥ずかしいのか、疑問を解消することなく自己流で書いてしまっている学生もいる。テキストを見ても簡体字の説明は意外に少ないので、教員が授業でもっと注意をうながすべきである。花尻奈緒子「日本語を母語とする中国語初学者における簡体字誤記の傾向」（『人文論叢』第34号、三重大学、2017年3月）は学生がよくまちがえる簡体字を取り上げ、そのエラーの特徴をまとめている。今後はこのようなデータを参照しつつ、簡体字の字体や筆順を細かく説明していくのが望ましい。本文をノートに書かせ、教員がそれをチェックすることによって、こまめに習得状況を確認していくのもよいだろう。授業で関連するスマートフォンのアプリを紹介するのも今後の自習の役に立つにちがいない。たとえば中国でもっとも权威的な字書『新華字典 第11版』のアプリを使えばいつでも筆順を調べることができる。また、台湾や香港をも視野に入れれば、繁体字についても説明していく必要があるだろう。

3.4 文法

本学では2年間の履修によって、中国語文法の基本的事項はほぼ全て網羅することができる。3年次はその応用・活用といった側面が強い。理解しているのと使うことができるのとは異なる。2年生を見ていると、まだ使える段階には至っていないようだ。文法に関しては、中国語でもっとも重要な語順をしっかりと把握できていない学生が多い。基本的な文型を把握しておらず、中国語の特徴をつかみ損ねているようだ。中国語の大枠として、「主題と説明」（主題にはシテだけでなく、ウケテもくる）、「情報の新旧」（旧情報は主語になれるが、新情報はなれない）といった説明を加えると、学生は英語や日本語との違いにはっとさせられるだろう。

文型も語順に注目して教えることができれば、より楽しく文法を学ぶこと

ができるだろう。たとえば所有を表わす構文“有”と“在”の相違点であるが、これもただ文型を示すのではなく、「情報の新旧」という中国語の大枠を示すことによって、文型が単に暗記ものではなく、理解するものであるという示唆を与えることができる。“有”は[場所+有+新情報としての人・もの]であり、“在”は[旧情報としての人・もの+在+場所]である。同じ存在を表わす場合でも、情報の新旧によって動詞も異なれば語順も異なるのである。基本的な文型としては、以下のものを挙げておきたい。(1) 名詞述語文、(2) 動詞述語文、(3) 形容詞述語文、(4) 二重主語文(主述述語文)、(5) 二重目的語文、(6) 連動文、(7) 使役文(兼語文)、(8) 受身文、(9) 存現文、(10) “是～的”構文、(11) “把”構文、(12) 比較文、(13) 疑問詞の連鎖構文。これらに副詞、アスペクト、前置詞、助動詞、連体修飾語、連用修飾語、複文、各種補語などを加えていけば、2年間ではほぼ基本的な文法事項を教えることができる。とくに各種補語は中国語の表現の幅を広げるものとして重要である。このことについて筆者はかつて「初級を終えたら何を教えるべきか—中国語準中級・中級テキストで取り上げられる補語について」(『名古屋外国語大学外国語学部紀要』第50号、2016年2月)で言及したことがある。

3.5 文化

複言語プログラムにおいては、当該言語のみならず、その言語の背景にある文化に対する理解をうながすことも求められる。では「文化」はいかに教えるのだろうか。

教員によっては中国の映画やドラマを見せることがあるだろう。しかし映画やドラマは教員の好みによることが多く、それが必ずしも学生のニーズに对应されているとはかぎらない。この点について教員は自覚的であるべきだ。本学にはMLC(メディアラーニングセンター)という国内の大学でも屈指のDVD所蔵数を誇る施設がある。教員がおすすめの映画を紹介すれば、それを見たいと思った学生は自らMLCで鑑賞することができる。

筆者はやはり言語という側面から、中国の文化を伝えていくようにした

い。文化といっても、大所高所から解くのではなく、庶民の日常生活に潜むものから伝えていくようにしたい。たとえばテキストに金額の表現が出てきたとき、中国では量り売りが日本よりも広く行われていることを説明する。食堂では米飯や水餃子も“両”(50グラム)単位で求めることになるし、ばら売りのチョコレートやキャンディーなども“斤”(500グラム)単位で売っている。また、市販のペットボトル入りのお茶には“无糖”(砂糖なし)と“微糖”(砂糖入り)のものがあることを紹介するのも、日中の文化的相違を考えるうえで示唆的である。こうしたものは「レアリア」(生教材)と呼ばれる実物(広告や看板など)を通して紹介するのが効果的である。「レアリア」については近年研究が進んでいる(中西千香ほか『中国語教育のためのレアリア読本』好文出版、2018年2月)。

日本のメディアによくあるように、中国人を十把一絡げにして説くのではなく、広大な国土ゆえの地域性や世代による価値観の相違点などに言及すべきであろう。地域性に関しては食の嗜好がもっとも身近な例として挙げられよう。俗に言う“南甜北咸, 东辣西酸”(南は甘く北は塩辛い、東は辛くて西は酸っぱい)である。

さいごに

以上、本学の複言語プログラムにおける中国語の概要を紹介し、筆者なりの提言を思いつくままに述べてみた。筆者としては、本学の複言語プログラムは中国語を学ぼううえでその基礎を習得するのに十分な時間を確保された、すばらしいものであると思っている。近年多くの大学が第二外国語の授業を削減する傾向にあるなかでは、まさに外国語大学としての面目躍如といったところである。これをよりよいものにしていくためには、授業に対する工夫を教員がより練っていかねばならないし、学生の主体的な学習も求められよう。また、2年次で学習をやめることなく、3年次まで学び続けていくことも求められよう。